道具屋

Vogel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道具屋

【Ｎコード】
Ｎ９８１７Ｒ

【作者名】
Ｖｏｇｅｌ

【あらすじ】
水野圭祐は、もうすぐ高校一年生。中学生最後の春休みをだらだらと過ごしていた。
そしてふと見つけた『道具屋』に入ると――
人が倒れていた。
ひょんなことから店で働くことになってしまった主人公と、店主であるシルクの、色んなお話。

あなたを採用します

俺こと、水野圭祐は現在中学三年生。といっても、もうすぐ高校生になるのだが。

まあ、そんなことは置いといて、残り少ない春休みを満喫……しきれていなかった。

今日も今日とて、家の近くを特に用事もなくうろうろしていた。

今歩いているのだって、何か面白いことでもないかなー。ぐらいの考えでだ。

別に、家にいたって良かったのだが、なんとなく外の空気が吸いたくなったような気がしたんだ。

でも、家の近くではどこも普段と変わったところはないだろう。そんな気はしてたんだ。

実際、家を出てから十数分、特に変わったところはない。

「そろそろ帰るかなー」

と、回れ右をした時だった。

あった。あったよ変わったところが。

そこは、前通った時には何もなかったはずだ。まあ、空き地だと示す看板はあったが。

それが、どういうわけか、今はそこに店がある。

店の看板には、『道具屋』と書かれている。

それよりも、気になったのはその店の外観だ。

木だ。木でできている。

このあたりの建物は、ほとんどがコンクリートでできているはずだ。それなのに、この店だけ木造だ。

そして、こんな目立つのに、通行人は誰も見向きもしない。まるでここには何もないかのように。

とりあえず入ってみよう。この『道具屋』とやらに。

それで、少しは暇が潰せるだろう。

俺はドアの取っ手をつかむと、手前に引いた。ドアは何の抵抗もなくスッと開いた。

店の中に入ると、店中に様々な商品が置いてあった。そして窓が一つもない。壁や天井に何か白い物体が所々くっついていて、それがぼうっと光っている。そのおかげで店内は明るい。

店に置いてあるものは、本や皿、アクセサリー、メガネ、服、などなど。全く統一感というものがない。

おそらく、リサイクルショップか何かなんだろう。面白いものが置いてあるかもしれない。

そして、俺は店の奥の方に行ってみた。

レジカウンターみたいなところがあった。そこに商品を持っていって買うのだろう。

「そういえば、さっきから誰も居ないな」

客どころか、店員の姿も見当たらない。この店ほんとにやってんのかな。

と、人の気配を感じた。たぶんレジの後ろの方。ここからは見えないが。

「ちょっと見てみるか」

俺はレジまで行くと、上から後ろを覗いてみた。

人がうつぶせで倒れていた。

「だ、大丈夫ですか？」

近寄って声をかけてみると、その人はもぞもぞと起き上った。

長く伸びた白い髪。それはとてもつややかで

赤い右目に青い左目、それはまるで宝石のようで。

そしてその服装は、魔女のようで。

なんかのコスプレかなぁ。

そしてその人は、
「少しおなかがすいてしまって……」
と、力なく答える。
身長からして中学生、下手すると小学生。声も年相応に幼い感じだ。
しばらくお互いに言葉を発することなく見つめあった。
それにしても、この少女は何者なのだろうか。
状況からしておそらくここの店員だが、他に人がいる様子はない。それに、その恰好もかなりおかしい。ここの店主は一体何を考えているのだろうか。
などと考えていると、いつの間にか店の奥のドアの中に入っていった少女は、紙と財布を持って戻ってきた。
「あの……おつかいに行ってきてもらえませんか？」
少女は申し訳なさそうに尋ねてきた。
色々気にはなるが、特に断る理由もないので、
「いいですよ」
俺はあまり考えることなく承諾した。
「それでは、これをお願いします」
少女が紙と財布を渡してくる。そこには簡単な地図と店の名前、そして商品の名前が書いてあった。
そういえば、敬語じゃなくて良かったかな。俺の方が年上だろうし。まあいいや。

少女に頼まれたものは大福だった。数は三つ。店の名前は聞いたことがあったが、入ったことはなかった。
それにしても、会っていきなりおつかいを頼むとは、かなり不用心ではないだろうか。
財布をそのまま持ち逃げされるとは考えなかったのだろうか。
まだそんなことは思いつかないほど純粋なのかな。

などと考えているうちに、店の前に戻ってきていた。

店の中に入ると、少女はレジの所にいた。
「大福、買ってきましたよ」
まだ、敬語のままだった。
「お疲れ様です。それではこちらにどうぞ」
そう言うと少女は、店の奥のドアを開け、中に入っていく。俺もそれに続いた。
ドアの奥は、リビングダイニングだった。キッチンにテーブルにいすに、ソファー。テレビまである。
「ここに座っていてください」
少女は、いすの一つを指し示すと、俺から大福が入った袋を受け取り、キッチンに向かう。
やかんでお湯を沸かし、皿の上に大福を置いて、お湯でお茶を淹れている。
「どうぞ」
少女は、テーブルの俺の前の所に、大福が乗った皿と、お茶が入った湯のみを置いた。
大福とお茶。なんとも『和』な感じだ。とことん少女と合わない。
そして、少女は俺の向かいに座ると、
「それでは、いただきましょうか」
そう言って、大福を食べ始めた。
「あ、じゃあ、いただきます」
俺も大福を一口食べる。なかなかにうまい。
しばらく、黙々と大福を食べ、お茶を飲む。
少女は、大福を食べ終えると、
「あなたを採用します」
とだけ言った。
「……はい？」

反応するのにずいぶんと時間が必要だった。
採用？　おそらくアルバイトか何かだろうが、あいにく俺はバイトの面接を受けに来たわけじゃない。客として来たんだ。
しかし、困惑する俺にかまわずに、少女は色々と話し始めた。

まず、名前。シルクというそうだ。
そして、年はなんと、俺より上だそうだ。しかも十歳以上離れているとか。
さらには、その恰好はコスプレなどではなく、髪の毛も地毛で、目もオッドアイというやつで。
そしてそして、

魔法使い

だ、そうだ。
この妙に広かった店も、中の空間を魔法で広げているらしい。
しかし、それでも俺には信じられなかったので、
「じゃあ、証拠を見せてくれませんか？　あなたが魔法使いだっていう証拠を」
百聞は一見にしかずというやつだ。実際に見れば、信じられると思う。
「……分かりました。あんまり使わない方がいいんですけど」
少女、シルクさんは、やれやれといった感じで呪文を唱え始めた。ただ、小さな声だったのであまり聴こえないし、聴こえてもその意味を理解できなかった。
そして、呪文を唱え始めてから数秒の後に、もう何も乗っていなかった皿に、俺の目の前の皿に、大福が現れた。
「どうぞ、召し上がれ」
シルクさんは、俺に食べるように促す。

俺はおそるおそる大福をつかむと、それを食べてみた。
うん、おいしい。さっきの大福と同じだ。
そして、シルクさんは大福が入っていた袋を持ってくると、俺に中を見せた。
なるほど、空っぽだ。さっき食べたのが最後の一つなんだろう。
俺が買ってきたのは三つ。ちゃんと数も合う。
「そこの袋の中から、そこのお皿の上に、大福を移動させました」
シルクさんが説明する。
「なんか、あっさりしてますね」
あまり驚きはなかった。だって、なぁ。
「あまり強力な魔法は、使いたくないんです」
シルクさんは、少し困ったような顔で言う。
「そうなんですか」
「そうなんです」
俺は、そこでやめておくことにした。
「それよりも――」
そう、それよりも、
「さっきの『採用』って何なんですか？」
そうだ、そっちの方が重要だ。
「何って、アルバイトですよ」
シルクさんはさらりと言う。
「やっぱり……。じゃ、なくて！　俺は、バイトの面接に来たんじゃないんです！」
そう。俺はバイトの面接に来たんじゃない。客として来たんだ。
「時給八百円でどうですか？」
しかし、シルクさんは俺にかまわず話を進める。
「あの――」
「あと、こんなことは言いたくありませんけど……。首を縦に振らないと、帰してあげませんよ？」
シルクさんは、笑顔でそんなことを言う。

しょうがない。どうやら従うしかないようだ。
「分かりました」
俺が首を縦に振ると、
「では、明日からお願いしますね」
シルクさんは、笑顔で言うのだった。

その後、しばらく話した後、俺はシルクさんに見送られながら店を出た。
はたして俺は、春休み終了直前に、魔法使いの店で働くことになってしまった。
もちろん不安もあるが、少し期待している俺がいたりする。
シルクさんだって、腹黒いかもしれないけど、悪い人には見えなかった。それに、すっごくかわいい。
とにもかくにも、明日からバイトが始まるんだ。今日は早めに寝よう。

「まあ、なんとかなるよなー」

そんなことをつぶやきながら、俺は家路についた。

あなたを採用します（後書き）

この作品は、土台のようなものです。これから、書きたいことを書くための。
そのための『魔法』だったりします。
すでに、いくつか頭の中に話がありますが、この先どうなっていくかはまだ分かりません。
この作品が、僕と一緒に成長していく、そんな作品になればいいなと思っています。

適当ですよ適当

昨日の夜。夕食中両親に、
「俺、明日からバイトやるから」
俺はそう言った。
そして、両親は特に気にする様子もなく、
「そうか、頑張れよ」
とか、
「じゃあ、今日は早く寝なさいね」
とか、そんな反応だ。
俺の両親はこんな感じだ。きっと「俺、明日結婚するから！」とか言っても、同じような反応をするかもしれない。……やっぱそれはないな。
別に、俺をどうでもいいと思っているのではなく、むしろとても大事にしてくれる。
そして、俺のすることにむやみに口出ししない。応援してくれる。
だから、俺も安心して話すことができた。

現在、八時四十五分。約束は九時だったから、あと十五分ある。
そして俺がいるのは店の前。少し早かったかな。まあ、遅れるよりはいいか。
少し早めに来てください、とは言われたが、あと十分ぐらい待つか。
十分間何していようか……。
俺は、やっぱり中に入ることにした。
ドアの取っ手をつかんで、手前に引く。ドアは昨日と同じく、スッと開いた。
今なにげなく開いたドアだが、どうやらすごいものらしい。正確

には、ドアにかかっているという魔法がすごいそうだ。
俺がいるこの世界、そして他にも無数の世界が存在しているという。そして、その様々な世界にある同じ店のドアと、このドアはつながっている。ちなみに、他の店は空っぽだそうだ。
ともかく、すごいドアを開いて、俺は店の中に入った。
それと、店の中では翻訳魔法が効いていて、一部の例外を除いて言葉が翻訳されるというのも昨日聞いた。

店の中に入ると、シルクさんの姿はなかった。
まさか、外に出ているということはないだろう。たぶんあっちの方だ。
あっちとは、居住スペース、昨日大福を食べ、アルバイトをしろと脅された所だ。
そこで、俺は店の奥のドアへと歩いていった。
さて、このままドアを開けたら目の前でシルクさんが着替えていて、
「圭祐くん、エッチですね」
なんて言われかねない。まさかな。
バイト初日から、そんなへまをするのはまずいので、俺はドアをノックしてみた。
コンコン。
「シルクさん、いますか？」
そしたら、
「あ、圭祐くんですか？　中にどうぞ」
なんて答えが返ってきた。
入ってもよかったみたいだ。でも、やっぱりノックはした方がいい。だって前に……まあこれはいい。
中に入ると、シルクさんはソファーの上でくつろいでいた。
テレビでちょうど占いをやっている。俺は信じないわけではない

が、そんなに気にすることもない。そういえば、昨日の運勢どうだったっけ。
と、シルクさんはテレビを消すと、こちらに来た。
「おはようございます。圭祐くん」
シルクさんが笑顔であいさつするので、
「あ、おはようございます」
俺も、できる限りの笑顔で返した。
シルクさんは、俺を上から下までじっと見る。服装は、普段着でいいと言われていたので、昨日と同じようなものだ。一応、きれい目なのを選んできた。
「まあ、それくらいでいいでしょう。あとは、これを着けてください。」
そう言って、ペンダントを渡された。
銀色のチェーンの先にカプセルが付いていて、その中に褐色のうろこみたいなのが浮いている。
「あの、制服とかないんですか？　あと、このネックレスは？」
てっきり、制服にでも着替えるのかと思っていた。
「制服はありません。あと、それは『竜の守り』と呼んでいるのですが、ほとんどの攻撃から身を守ってくれる優れものです」
なるほど。って……攻撃？
俺が首をかしげていると、シルクさんが説明してくれた。
「どの世界でも、やっぱり悪い人というのはいるのです。なので、万が一に備えてです」
強盗対策ということか。案外危険な仕事なのかも？

「では、そろそろお店を開けましょう」
シルクさんはそう言うと、店の方に戻っていった。
さて、俺の仕事はというと、掃除とかシルクさんの話し相手、だそうだ。

「接客なんて、とてもじゃないができないからな」
だって、俺にはここに置いてあるもののことなんて全く分からない。
それにしても、シルクさんはどうして俺なんかをバイトにしたんだろう。後で聞いてみるか。
俺はそこらへんの箒を手に取ると、店の方に戻った。

俺は、床を箒で掃く。そんなに汚れてはないな。
そして、さっきから三十分くらい経つが、客はまだ来ていない。
「昨日聞いてましたが、ほんとに誰も来ませんね」
俺が苦笑気味に言うと、
「まあ、あんまり来られても困りますけどね」
と、シルクさんは仕方なさそうに答えた。
昨日聞いた話によると、まだこの店は数店舗しか開いていないようだ。しかも、あまり人が来ないような所にあるらしい。
二つ目に、時間の問題があった。やっぱり世界の間でも時差があり、深夜にしか開いていない所もあるそうだ。
そしてもう一つ、この店は、ある場合は入れないようになっている。それは、他の世界の客が店にいる時。客が入ると自動でロックがかかり、他の世界からは入れないようになるという。
でも、俺は客じゃないので、ロックはかからない。
ともかく、そんな理由で、あんまり客が来ないということだった。
結局、昼の休憩までに来たのは、二人だけだった。

「そろそろ、お昼にしましょうか」
シルクさんは、ふとそんなことを言った。
そういえば、腹が減ってきたような。
この店には、時計がない（商品の中に時計はあるが、俺にはよく

分からない）が、もうそんな時間なんだろう。
そんなわけで、俺たちは居住スペースに向かった。
シルクさんは、俺をいすに座らせると、昼食の準備を始めた。
「今日は、肉じゃがですよ～」
そんな、弾んだ声が聞こえてくる。
そして、用意されたのは、肉じゃがを始めとして、家庭的な料理の数々だった。
「これ、全部シルクさんが作ったんですか？」
「はい。私、お料理好きなんです」
俺が聞くと、シルクさんは笑顔で答えた。
料理はどれもうまかった。レストランだって開けるんじゃなかろうか。

一緒に食器の片付けを終えて、再び仕事に戻る俺とシルクさん。
何か聞くつもりだったけど、まあいいや。

午後の分の仕事もつつがなく終了。客はやっぱり少なかった。
「では、『竜の守り』を返してもらいますね」
入口の所まで、見送りに来たシルクさんが言った。
「りゅうのまもり？　あ、これか」
少し忘れていたが、思い出した。俺が首から下げているやつだ。
「どうぞ」
「はい。確かに受け取りました」
俺はそれを首からはずし、シルクさんに渡した。
そういえば、もうひとつ忘れていた。
「あの、ちょっと聞いていいですか？」
「はい。何でしょうか」
「どうして、俺をバイトにしたんですか？」

そう。俺には魔法なんて使えない。そして、店の商品だってよく分からない。だから、接客はきつい。
なのに、シルクさんは俺をバイトとして雇っている。これには何か、特別な理由があるのかもしれない。
しかし、シルクさんはあっさりと、
「特に理由はありませんよ」
そんなことを言う。
「適当ですよ適当。さあもう暗くなるので早く帰った方がいいですよ」
シルクさんは早口で言うと、俺をドアの外に押し出した。外は夕暮れだった。
「では明日もよろしくお願いしますね」
バタンッ
ドアを閉められた。仕方ない、帰るか。

「案外、楽な仕事なのかもしれないな」
そんな、のんきなことをつぶやきながら、俺は帰り道を歩いていた。
数日後に、そんなことはなかったということが分かるのだが、それは別の話。

今日は、いい一日でしたとさ。

適当ですよ適当（後書き）

さて、二話目です。本当はこの話は考えてなかったのですが、気づいたらこんな話ができていました。
次回も、できれば近いうちに投稿したいです。少しは話を考えているので。

昔の……友人です

春休み終了二日前、その日は朝から雨だった。
傘があっても服がぬれてしまった。
「シャワー浴びてきますか？」
結果濡れてしまった俺は、シルクさんにこの言葉で出迎えられた。

脱いだ服は、言われたとおりに洗濯かごに入れておいた。乾かしておいてくれるらしい。
バスルームに入って周りを見てみたが、おそらく最新式のやつだ。テレビで見たことがある。けっこう金持ちだったりするのかも。
とりあえずシャワーで体をさっと流し、さっさと出た。

バスルームから出たが、まだ服は乾いていないようだ。まあ、魔法でも使わない限りそんなに早くはできないだろう。シルクさんはあまり魔法を使わないようだし。
そしてそれを示すかのように、乾燥機が絶賛稼働中だった。
とりあえず、バスタオルで体を拭いたが着るものがない。
と、シルクさんが何か白いものを持ってやってきた。
「とりあえず、服が乾くまでこれを着ていてください」」
バスローブだった。初めて見た。
服が乾くまでは、バスローブ姿でリビングでくつろぐことになった。
「けっこう似合いますね」
「……そうですか？」
この恰好をほめられてもあまりうれしくない気がした。
リビングを見まわすと、ふと一枚の写真が目に入った。

写っているのは、シルクさんと、隣に男が写っていた。そして、なんだか俺に似ている。目が黄色い以外は。
俺は一人っ子だが、もし兄がいたらこんな感じかもしれない。
あまりにも気になったので、シルクさんに聞いてみた。
「あの写真に写ってる人って誰なんですか？」
「えっと……昔の……友人です」
シルクさんが、顔を赤くしながら答えた。
もしかしたら、というかたぶん。恋人なのかな。
だとすると、俺をバイトにしたのは……昔の恋人に似てたから？
何とも複雑な気分だ。
「すみません、確かに最初はそれもありました……。でも、あなたを雇ったのはそれだけが理由じゃありませんよ」
俺の雰囲気を察したのか、シルクさんが謝ってきた。
「いや、俺も気にしてないんで。でも、ほんとに似てますね」
「私もびっくりしましたよ」
まあ、世界には三人自分とそっくりな人がいるって言うしな。
そしてそのあたりで服も乾いたので、準備をして仕事が始まった。

「相変わらずお客さん来ませんね」
「そうですねー」
シルクさんとそんな会話をしていると、ドアがスッと開いた。
ドアは開いたが、そこに誰もいなかった。
「圭祐くん。下ですよ」
下を見てみると黒猫がいた。
「ニャー」
黒猫は俺を見上げて鳴いた。
「シルクさん、どうしますか？」
「そうですね……どうしましょうか」
シルクさんがそう呟きながらこっちに来た。

すると、
「久しぶりだね、シルク」
黒猫がしゃべった。
「その声……まさか……！」

「あの話は本当だったんですね。その姿を見る限りでは」
店は休みになり、俺とシルクさん、そして黒猫はリビングにいた。
「実験中の事故で猫になってしまうなんて……。あなたらしくないじゃないですか」
「でも、完全に猫になったわけじゃないよ。こうやって話すこともできているし、魔法だって使える」
「まあ、こうして会うことができただけでもよしとしましょうか。とにかく、久しぶりですね」
「本当にね。また会えてよかったよ」
シルクさんと黒猫が話している横で、俺は特に何をすることもなく座っていた。
「それで、さっきから気になってたんだけど、その子は？」
黒猫が俺の方を見ながら訊ねる。
「えっと、バイトくんです」
「なるほど。よろしく、バイト君」
どうやら黒猫は俺の名前をバイトだと思っているらしい。イントネーションが違った。
「そんなにふてくされないでください。ちゃんと紹介しますから」
見かねたシルクさんに気遣われた。
「この黒猫はレオンといって、私の友人です。……あの写真の人物です。そして、こちらは水野圭祐くん。アルバイトとして働いてくれています」
今度はしっかり紹介してくれたシルクさんだったが、少し顔が赤くなっていた。

「よろしく。昔の僕にかなりそっくりな圭祐君」
この一言でさらに赤くなった。
「よろしくお願いします。レオンさん」
「レオンでいいよ。猫相手に敬語はなんだか変だろう？」
「たしかに。じゃ、改めてよろしくな。レオン」
レオンが器用に差し出したしっぽをつかんで握手した。いや、握手じゃないか。
「ところであの写真だけど、なんで切っちゃったんだい？　まあだいたい予想はつくけれど」
そういえば、写真の形がおかしかったな。ほとんど正方形だったな。
「だって、なんだか私が子供みたいに見えるじゃないですかぁ」
「やれやれ、そっちの方がよっぽど子供みたいだよ……。切った方はまだあるよね？　まさか捨ててないよね？」
「す、捨てるわけないじゃないですか！　今持ってきます」
シルクさんはそう言うと、たんすの方にドタドタと走って行った。
「シルクさんには悪いけど、あれでも親子みたいに見える」
レオンに小声で話しかけたが、
「聞こえてますよ！　バイト代減らしちゃいますよー！」
どうやら聞こえていたらしいシルクさんに、そんな恐ろしげなことを言われた。
「それにしても、大人びた人だと思っていたけど、案外子供なんだな」
「まあ、あの口調も大人っぽく見せようとしてるわけだからね。まるで子供みたいだよ」
「もう二人とも！　おやつ抜きですよー！」

その後、けっこうふてくされていたシルクさんだったが、俺が大福を買ってきたことで機嫌を直した。やっぱり子供みたいだ。

そして、俺とシルクさんの前のテーブルにはお茶と大福が用意され、レオンの前にはさらに入った牛乳と大福が用意された。床の上に。

「そうだよね。僕はもう猫なんだよね……」

レオンが少し落ち込んでいた。まあ仕方がない。猫なんだし。

「さて、とりあえずはこれをどうにかしないと」

気を取り直したレオンは、空いているいすに飛び乗ると前足をテーブルに乗せて立った。

今、俺たちの視線の先には一枚の写真の切れ端がある。

そこに写っているのは、活発そうな女性だった。こっちもシルクさんとは物の意味で子供っぽかった。

「それで、この人も友達なんですよね？」

「もちろん、そうですよ。ガーネットといいます」

「今頃どうしてるんだろうね」

シルクさんもレオンも懐かしそうな顔をしている。

「さて、じゃあ修復するとしようか。ちょっと失礼」

レオンはテーブルに飛び乗ると、写真と切れた法の写真にしっぽを向けた。

『リペア』

レオンがそうつぶやくと、写真が光りだしてぴたりとくっついた。そして写真は見事に修復されていた。

「おお……すごい」

思わず感嘆の声が漏れた。

「まあ、このくらいなら大したことないよ。腕をくっつけたりするわけじゃないからね」

腕？　また恐ろしいことを言うな……。

しかし、今のは呪文なのだろうか。シルクさんのは聞き取れなかったけど、今のははっきりと聞き取ることができた。

「なあレオン。今のって呪文なのか？」

とりあえず聞いてみた。

「たしかに呪文だけど……。君は魔法を見るのは初めてかい？」
「いや、一回シルクさんに見せてもらったけど」
俺がそう言うと、レオンの視線はシルクさんの方に向いた。
「シルク……君って人は……。一体どんな魔法を使ったんだい？」
「え、えっと……物体移動を少々……」
レオンはため息をつくと、今度は俺の方を向いた。
「せっかくだから、少し魔法について教えておくよ」
レオンはそう言うと、床へと飛び降りた。
「さて、まずは呪文のことから話そう。まず、魔法を使うにはイメージが大切なんだ。そして、そのイメージを強くするために大体の魔法使いは呪文を使う。それで、呪文には特に決まりはない。本人がイメージを強くできれば何でもいいんだ。だから、僕の使う呪文はシルクの使うものとは違う」
なるほど、なかなか分かりやすい。
「あと、魔法を使うには魔力が必要なんだけど、大体の魔法使いは体内にため込んだ魔力を使う。それで、シルクのことなんだけど、彼女は今あんまり魔力がないんだ。この店の証明と加、入口のドアにいつも魔力を使っているからね。だから、あんまり魔法は使わせないようにしてあげてね」
「じゃあ、そろそろ魔力を回復させてくださいね」
シルクさんがそう言うと、レオンは少し渋ったが話をやめた。
どうやら食べ物を食べると魔力が回復するようだ。

おやつの時間も終わり、仕事を再開することになった。
「じゃあレオン。またいつでも遊びに来てくださいね」
入口の所で少し寂しそうにレオンを見送るシルクさん。でもレオンは動かなかった。
「あー……そのことなんだけど。僕をここに置いてくれないかな？ペットでいいから」

レオンの衝撃発言に、俺もシルクさんもしばらく固まってしまった。
そして、
「そ……そんなのいいに決まってるじゃないですか！　今日はもう店じまいにしてパーティーをしましょう！」
シルクさんはそう言うと、レオンを抱き上げた。

その後は、俺が買い物に行き、パーティーをやって、とても楽しい時間を過ごした。
しかし、レオンがいるとなると俺のいる意味がなくならないだろうか。
俺……ピンチだったりする？

昔の……友人です（後書き）

なんだかずいぶんとペースがおそくなってます。
これからも気が向いたときに書くと思うのでよろしくおねがいします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9817r/

道具屋

2011年6月9日00時08分発行